

論文特集「情報編纂：要素技術と可能性」に寄せて

加藤 恒昭

(東京大学)

WWWをはじめとしてさまざまなメディアによる膨大な情報が我々の回りに満ちあふれている昨今、多種多様な情報から必要なものだけを取り出し、その内容を素早く理解したり概観したりすることがますます重要となっています。我々はこのようなニーズに答えるための基盤技術として、情報編纂 (<http://taurus.c.u-tokyo.ac.jp/InformationCompilation/>) を提案しました。多量雑多な情報を知的に編纂し、その理解を容易にするとともにそれへのアクセスを支援することを目的とするのですが、そこにおいて、さまざまなモード、メディア、ジャンルを横断して現実世界の雑多な情報を入力とし、出力においても視覚情報などの非言語情報と言語情報を協調させたマルチメディアプレゼンテーションを活用していくモード横断性を強調するとともに、情報の理解・概観の支援と情報へのアクセスの支援とを縫い目なく統合することによる情報活用支援の連続性を強調しています。この2点を強調することで、既存の技術分野や研究分野の境界を越えた新しい視点が得られることを期待しているためです。

「情報編纂の基盤技術」の提案は2006年人工知能学会全国大会にて近未来チャレンジとして行われ、翌年の2007年人工知能学会全国大会では23件という多数の研究発表の応募をいただき、関連2セッションで9件、近未来チャレンジセッションで12件の発表が行われました。このほかにも情報編纂に繋がるいくつかの研究活動が行われていましたので、それらを受けて、情報編纂の基盤技術に関する最初の論文特集号として本企画を行いました。

20本の論文投稿をいただき、査読の結果、6本が掲載されることになりました。確立し評価された研究成果に加えて、今後の展開が期待できる中間報告や、情報編纂に新たな展望を与える論文をということで募集し、査読をお引き受けいただいた方々にもその趣旨をお伝えしたのですが、やはり一本一本の論文を見てしまうとどうしても完成度について厳しくなってしまうのか、採択率は

かなり低いものとなりました。今後の展開や展望を評価できる形にもっていけなかったのは、ゲストエディタとしての力不足と反省しています。一方で、本特集号に採録された論文を見ますと、いずれも独創的なアプローチをもった興味深いもので、テキストや映像や音楽などのさまざまなメディアを対象に、その内容理解や探索などの高度な利用に向けての可視化技術や、それに寄与する解析技術が提案されています。内容の濃い論文特集号になっていると思います。

ここに示された情報編纂、そして2007年、2008年の人工知能学会全国大会で発表いただいたさまざまな情報編纂に対して、共通する技術の本質を捉え直し、情報編纂のコンセプトを深化させていくのが「情報編纂の基盤技術」の提案者である我々の次の仕事であろうと認識しています。その意味でも、多くの論文をご投稿いただき、その広がりを実感させていただいたことに改めて感謝しています。

末筆となりましたが、編集幹事をお引き受けいただいた松下光範氏 (NTT CS 研、氏は「情報編纂の基盤技術」の提案者の一人で「我々」に含まれます) と高間康史氏 (首都大学東京) に、そして編集委員を快くお引き受けいただいた神門典子氏 (国立情報学研究所)、小林一郎氏 (お茶の水女子大学)、榊井文人氏 (三重大学)、森辰則氏 (横浜国立大学)、長尾 確氏 (名古屋大学)、難波英嗣氏 (広島市立大学)、那須川哲哉氏 (日本 IBM)、笹倉万里子氏 (岡山大学)、砂山 渡氏 (広島市立大学) に、心より感謝いたします。また、多くの方に査読をお願いし、厳しいスケジュールの中、誠実かつ丁寧な対応をいただきました。個々人のお名前をあげることはしませんが、本当にありがとうございました。

本論文特集を通じて、情報編纂研究に関心をもたれる方が増え、情報編纂のコンセプトを共有していただくとともに、それぞれの情報編纂研究を深めることに繋げていただければ幸いです。